

表紙の説明

四万十川沈下橋

河野芳久 陸自70

日本最後の清流と言われる四万十川は、四国の西南地区の水を集めて、高知県の四万十市から太平洋に注ぎ込んでいる。

四万十川の中流では、四国山地の山間を縫い曲がりくねって流れていた。川の両側は山だ。集落は、所どころ両岸の山から落ちる狭い急斜面の扇状地のようなところにあつた。

国道は、四万十川の片側の斜面を切り崩して走っている。対岸の集落に行くには橋が必要であり、それが沈下橋だ。

沈下橋とは、増水時には水面下に沈んでしまう橋のこと。水流で流されないように欄干などはなく、橋の両側は水の抵抗を小さくするため丸くしてある。だから、台風などの大水があつても流されずにすみ、建設費も当然安い。

台風の多いこの地域で、自然に逆らわず遜って自然の中に溶け込もうとする人々の知恵には感心せざるを得ない。

実際に車で橋を渡ってみると、慣れないせいか川に落ちそうに感じてしまうが、この地域では日常である。人々が昔から自然とうまく調和した生活を送っていると思うと、なぜかこの支流で産湯を浴びて育ったことが少し誇らしく思えてきた。

(偕行フォトクラブ会員)